

タブロイド地域紙「市民プレス」第61号（2013/07/5発行）の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次	
-PAGE 2	鎌倉に幕府を開いたこの人 源頼朝（その一）
-PAGE 5	御所の跡地一帯は開発が続く 史跡「永福寺跡」の整備
-PAGE 17	頼朝の生立ちを巡って・・・ 坊門姫の血筋が四代將軍となる
-PAGE 28	武士の台頭と平氏の政權 平清盛と源義朝の進出
-PAGE 33	『吾妻鏡』の原文を読む 大倉御所への引越し
-PAGE 49	永福寺の造営を巡って・・・ 西城紀行 その3 深瀬克

鎌倉に幕府を開いた・・・この人 源頼朝 その一

鎌倉の大倉郷に入府する・・・

以仁王もろのひとおうの令旨りょうし旨を受けた頼朝が、配所の伊豆から挙兵したのは、治承四年（1180）八月のことである。緒戦では平家方に敗れたが、劇的な再起行を経て、十月、父義朝所縁の鎌倉に入府した。拠点を大倉郷に定め、大庭景義おおぼかけよしを担当者として新しい館が建設された。

当初は父の屋敷が所在した亀ヶ谷が候補地であったが、手狭なことから、義朝の菩提を弔う寺がすでに建てられていたので、大倉の地が選ばれた。ここは、鎌倉の外港六浦を結ぶ道沿いの地であり、四神相應の地（四つの方角を司る四神に相應しい地相をもつ）であったことによるといわれる。大倉御所はのちに幕府としての諸機能を加え、武家政権の拠点として、朝廷に対抗する力を得た。

頼朝の邸宅は寝殿造り

東・西・南・北に門があり、敷地内の寝殿（正殿）は南の庭に面して建てられた一般的な貴族の「寝殿造り」だったという。頼朝は幼少時には京都に在って、宮人たちと親しかつ

たことが、邸宅の構築に影響を与えたと推定されている。東西に対屋たいのや（別棟）を配し、寢殿と渡殿わたので結ばれていた。

配下が控える侍所は、十八間（37.8m）もあって、貴族の邸宅の二倍もの大きさだった。既十五間（31.5m）、馬三十頭を収容する規模をもち、その近くに御家人の宿館が立ち並んでいた。御所内には御寝所などの私的なゾーンと、公的なゾーンがあり、政務は問注所や評定を行う西中門廊、内厩侍上などで行なわれたという。

完成した新邸に入る・・・

頼朝は十二月十二日、上総かずさ広常ひろつねの邸を出て、完成した新亭に入った。多くの武士が従い、儀式が行なわれた。出仕の場である侍所には三百人余りが二列に並び、侍所別当に任じられた和田義盛が帳簿に出欠を記録した。

『吾妻鏡』には、「東国の人々は、頼朝が歩む道を目にして、鎌倉の主として推戴することになった」と記されている。それまで鎌倉は漁民や農民のみが住む辺鄙な所だったが、道を整えて村里に名前をつけ、家屋が建ち並ぶようになったという。



絹本着色伝源頼朝像 国宝

京都市右京区高雄にある高野山真言宗遺迹本山の神護寺所蔵。『神護寺略記』には頼朝と記されているが、足利直義では、との説もある。

火災に遭って再建されたが・・・

その後、建久二年（1191）三月、また建保元年（1213）五月に焼失、同一敷地に再建されたが、承久元年（1219）十二月に焼失して後は再建されず、その後執権北条義時の邸内を経て、三代執権の泰時は、若宮大路と小町大路の間を東西に結ぶ宇都宮辻子（辻子は小道のこと）（1225～1236）に御所を移したが、さらに若宮大路御所（1236～1333）へと移転した。

御所の所在地はいま・・・

大倉御所の跡地は、鶴岡八幡宮の東側に在り、現・鎌倉市雪ノ下、清泉小学校周辺、東西約270m、南北約200mの敷地だったといわれる。近年、武家の古都・鎌倉の中核となる遺跡としてクローズアップされている。

史跡「法華堂跡」

清泉小学校裏山（大倉山）の中腹、かつて頼朝が政務を執った幕府を見下ろす場所に、彼の墓地がある。ここは、文治五年（1189）、聖観音像を本尊として頼朝が建立した持仏堂（のちに「法華堂」と呼ばれる）の跡地で、死後、頼朝は、ここに葬られたと伝えられる。

頼朝の墓を中心として、この一帯は、「法華堂跡」として国の指定史跡になっている。頼朝の墓地とは別に、平成十七年、東隣りの山の中腹で、北条義時のものと考えられる法華堂跡が発掘調査された。その結果によると、一辺が8メートルの正方形の建物だったようだ。義時の法華堂は、遺言によつて建立され、『吾妻鏡』には、「故右大将家（源頼朝のこと）法華堂の東の山上をもつて墳墓となす」と記載されている。

御所の跡地 一帯は開発が続く

鎌倉市の「雪ノ下」（降った雪を頼朝が保存させた故事による）、「二階堂」一帯は、頼朝が社寺、邸宅を構えた跡地として、由緒のある地域であるが、鎌倉幕府が倒れたのちに畑地や荒地と化し、近年になつてから、学校用地や民間の住宅地に変貌した。

現・清泉小学校々地は・・・

大正時代（八年か？）、この辺り一帯の土地を取得した人、神田兼太郎は、江東区亀戸に在った『亀戸コークス』の創業者といわれる。当時、現・清泉小学校の敷地（大蔵幕府址）には、藁葺きの屋敷が十一棟あったが、財政難で困った鎌倉市の市長が、神田氏に何とかして欲しいとお願ひしたところ、藁葺の家屋を保存すること、という条件で、ただ同然の価格で畑地を市に譲った。鎌倉市はそれを清泉に売却して財政難から脱却したらしい。その後屋敷は火事で焼失して校地になった。

その後屋敷は火事で焼失して校地になった。

二階堂「元治苑」跡地の開発

清泉小学校に近い二階堂にも、神田氏は、約2400平米の屋敷「元治苑」を所有していた。百年以上を経た古民家と日本庭園の在る邸宅は、近所の人たちから、「神田屋敷」と呼ばれていた。

ところが最近、この土地を「三菱地所」が取得し、庭木を伐採、民家を取壊して、四階建ての共同住宅の建設がスタートした。この計画を事前に知った鎌倉市当局は環境の維持を説得したが、その願望は空しく消えた。

幕府跡地は地下3メートル程度のところに埋没しているので、現在はまだほとんど無傷で残されているらしい。そこで、これを保存するために、古都保存法四条「歴史的風土保存区域」に指定して、建物を地上8メートル以下の二階建とするなどの緊急策も提案されている。

市内では、集合住宅の建設計画に対して、地域の市民も挙つて反対しているが、成り行きは、予断を許さない。

史跡「永福寺跡」の整備

前記した大倉御所址地の西方、北寄りには「永福寺」の跡地が在る。この寺は、源頼朝が中尊寺の二階大堂、大長寿院を模して建立した寺院で、鶴岡八幡宮、勝長寿院とならんで当時の鎌倉の三大寺社の一つであった。

二階建てだったことから二階堂ともいわれ、現在、永福寺跡周辺が「二階堂」と呼ばれているのは、この建物に由来している。昭和五十八年（1983）から開始された調査で翼廊などが発見され、国の指定史跡となっている。

二階堂を中心に北側に薬師堂、南側に阿弥陀堂が配置され、東を正面にした大伽藍で、前面には、大きな池が作られていた。

歴史公園としてオープンするために、大掛かりな整備事業が進められ、三堂（二階堂、阿弥陀堂、薬師堂）の木製基壇の復元と三堂をつなぐ廊下（複廊）の礎石を設置する工事が終わり、次年度は庭園を復元する予定という。

永福寺建立の由縁は・・・

源頼朝は文治五年（1185）九月の奥州合戦を契機に、源義経・藤原泰衡をはじめとする数万の怨霊をはずめ、冥福を祈るための寺院の建立を発願し、その年

十二月永福寺の建立に着手した。建立には畠山重忠ら関東の御家人の助力があったことが『吾妻鏡』に記されている。建久三年（1192）本堂が完成し、落慶供養が行われた。しかし、応永十二年（1405）の火災ののち廃絶した。

姿を消した勝長寿院

源頼朝が相模国鎌倉大御堂ヶ谷（現神奈川県鎌倉市雪ノ下）に建立した寺院で、阿弥陀山勝長寿院と号す。大御堂、南御堂ともいい、当時は鎌倉の三大寺社の一つであった。

その沿革は・・・

源頼朝は、父源義朝の菩提を弔うため、寺院の建立を発意し、元暦元年（1184）、大御堂ヶ谷の地に定め、十一月廿六日、地曳始の儀（家屋などを建築するための地ならしの儀式）を行なった。頼朝は後白河院に依頼して義朝の首を探し出し、義朝とその腹心鎌田



制作：鎌倉市と湘南工科大学のCG復元プロジェクト

1199	~	1194	1193	1192	1191	1190	1189	紀元
建久10年 正治元年		建久5年	建久4年	建久3年	建久2年	建久元年 文治6年	文治5年	年号
9月23日 頼家が永福寺で蹴鞠を行なう 正月13日 頼朝、53歳で没する	12月26日 新造葉師堂完成。導師は前権僧正勝賢	11月27日 阿弥陀堂完成、導師は前権僧正真円	1月21日 頼朝、二階堂建設現場で土工事を見る 8月27日 頼朝は、庭造りの専門家、静玄を京都から招いて庭石の配置について相談 9月11日 静玄、庭の池に石をならべ、頼朝はこれを見学 10月29日 二階堂の扉と仏背後の壁画が完成（奥州毛越寺の金堂の壁画を模す） 11月13日 頼朝、庭石の置き方に満足せず直させる 11月25日 二階堂完成、導師は三井寺の公願			2月15日 永福寺を建てる場所を決めるため、頼朝は大倉周辺を探索	7月19日 頼朝は、奥州藤原氏と戦うために、鎌倉を出発 12月9日 頼朝、奥州平泉で見た諸堂に感激して、永福寺の建立を決意	永福寺小史 <small>よふくじ</small>

1260	1250	1247	1245	1232	1229	1217	1214	1211	1200	紀元
文応元年	建長2年	宝治元年	寛元3年	貞永元年	寛喜元年	建保5年	建保2年	建暦元年	正治2年	年号
2月18日 宗尊親王、桜の花を見る	3月10日 頼嗣が永福寺で花見	6月5日 三浦の乱、三浦光村、永福寺惣門の内側に陣をかまえる	10月12日 頼経、如法経を永福寺奥山に納める	11月29日 頼経が雪見、釣殿で和歌会を行なう	3月15日 頼経、花見をする 10月26日 頼経、蹴鞠を見る。和歌会を行なう	12月25日 実朝、永福寺僧坊で終夜和歌会を行なう	3月9日 実朝、永福寺で桜の花見	4月29日 実朝、泰時等とほととぎすの声を聞くために訪れる	閏2月29日 頼家、僧・稚児等と釣殿で遊ぶ	永福寺小史 <small>よふくじ</small>

紀元	年号	
1280	弘安3年	10月28日 鎌倉大火で、二階堂も焼失
1310	延慶3年	「北条九代記」「見聞私記」 1月6日 浜辺あたりで上った火の手で二階堂、大門、鐘楼すべてが焼け落ちる
1333	元弘3年	「梅松論」 5月 北条一族滅亡後、千寿王（後の足利義詮）が別当坊に滞在
1405	応永12年	12月17日 永福寺炎上

政清まさきよの首は、勅使となった大江公朝おほえのきみともによって鎌倉に届けられた。

文治元年（1185）九月三日、義朝の遺骨と政清の首は南御堂の地に埋葬され、頼朝の他は、平賀義信とその子息惟義こゑよし、源頼隆よりのたから平治の乱の関係者のみが立ち会いを許された。

十月二十四日、堂舎が完成して、盛大な落慶供養が行なわれた。源氏の菩提寺の性格が濃く、三代將軍源実朝は暗殺されたのち、勝長寿院の傍らに葬られている。

その後康元元年（1256）十二月に火災で伽藍が焼失したが、正嘉二年（1258）、北条時頼によって再建された。その後、永仁三年（1295）にも焼けたが、正中二年（1325）、同じく焼失した建長寺とともに再建費用を得ることが検討され、元との交易を行なう寺社造営料唐船（建長寺船）が派遣された。

勝長寿院は、鎌倉幕府滅亡後、鎌倉を治めた足利氏の鎌倉公方によって尊重された。しかし、足利成氏（古河公方初代）が享徳四年（1455）に鎌倉から下総国古河に移り、同寺の門主であった成潤せいじゆん（成氏の兄弟）も、反成氏勢力に擁され、日光山で拳兵すると、同寺は顧みられなくなって荒廃した。現在、その跡地は市街化され、当時を偲ぶ術は全く無くなった。

永福寺小史

威容を誇る鶴岡八幡宮は・・・

河内源氏（河内国、現・大阪府羽曳野市を本拠地とする）の二代目源頼義が、前九年の役での戦勝を祈願した、京都の石清水八幡宮護国寺（あるいは河内源氏氏神の壺井八幡宮）を、康平六年（1063）八月、鎌倉の由比郷鶴岡（現・材木座1丁目）に「鶴岡若宮」として勧請したのが始まりである。

永保元年（1081）二月には、河内源氏三代目の源義家（八幡太郎義家）が修復を加えた。治承四年（1180）十月、平家打倒の兵を挙げ、鎌倉に入った河内源氏後裔の源頼朝は、同月十二日に、現在の地である小林郷北山に遷し、以後社殿を中心にして、幕府の中核となる施設を整備した。

建久二年（1191）、社殿の焼失を機に、上宮と下宮の体制とし、改めて石清水八幡宮護国寺を勧



鎌倉市内地図

請した。武家源氏、鎌倉武士の守護神、初代将軍源頼朝所縁の神社として武家の崇敬を集めてきた。

鎌倉幕府が衰退した後は、僧坊の数も減少したが、戦国時代、里見氏により焼き討ち（鶴岡八幡宮の戦い）に遇ったのち、北条氏綱が再建を果たした。江戸時代には、江戸幕府の庇護を受けて規模が大きくなり、仁王門、護摩堂、輪蔵、神楽殿、愛染堂、六角堂、観音堂、法華堂、弁天堂等が建築され、徳川家光の治世に、薬師堂、鐘楼、楼門なども建てられた。

参道の若宮大路

鶴岡八幡宮の参道は若宮大路（一部を除いて国指定史跡）と呼ばれ、由比ヶ浜から八幡宮まで鎌倉の中心をほぼ南北に貫いている。京の朱雀大路を模して源頼朝が自らも加わって築いたという。二の鳥居からは段葛（鎌倉時代には作道といわれた）と呼ばれる車道より一段高い歩道があり、そこを抜けると三の鳥居があつて境内へと到る。

扇ヶ谷の寿福寺は・・・

JR横須賀線の鎌倉駅から北鎌倉駅間の線路沿い、西側の山際一帯の地名は扇ヶ谷、ここに鎌倉五山第三位の寺院、寿福寺がある。源頼朝が没した翌年の正治二年（1200）、

妻の北条政子が、栄西を開山に招いて創建した。境内は国の史跡に指定されている。

この辺りは、奥州に向かう源頼義が勝利を祈願したといわれる源氏山を背にして、亀ヶ谷と呼ばれる源氏家父祖伝来の地であり、頼朝の父・源義朝の旧邸もこの地にあった。治承4年（1180）鎌倉入りした頼朝は、ここに館（幕府）を構えようとしたが、すでに岡崎義実が堂宇を建て義朝の菩提を弔っていたことや、土地が狭かったため、当初の計画を変更したという経緯がある。

荏柄^{えがら}天神社の社殿を造営

縁起によれば、長治元年（1104）、雷雨とともに黒い束帯姿の天神画像が天降り、神験を恐れた里人等が社殿を建ててその画像を納め祀ったという。治承四年（1180）、大蔵の地に幕府を開いた源頼朝公は当社を鬼門の守護神と仰ぎ、更めて社殿を造立した。さらに徳川家康が豊臣秀吉の命で社殿の造営を行なった。

頼朝の生立ちを巡って・・・

源頼朝の祖先は、清和源氏の一流派となる河内源氏で、武勇伝で語られる八幡太郎義家の子孫になる。河内源氏の棟梁は、義家から義忠、為義、義朝へ、そして頼朝へと繋がる。

父義朝は都から東国に下向

三浦義明・大庭景義ら、東国の有力な在地の豪族を傘下に収めて勢力を伸ばした。都に戻った義朝は、東国の武士団を率い、保元の乱で戦功を挙げるが、三年後の平治の乱で敗北し、勢力挽回を図るべく東海道を下るが、道中で馬も失い、裸足で尾張国野間（現愛知県知多郡美浜町）に辿り着き、家臣で乳兄弟の鎌田政清の舅で、年来の家人であった長田忠致とその子・景致のもとに身を寄せた。しかし恩賞目当ての長田父子に裏切られ、入浴中に襲撃を受けて殺害された（『平治物語』）。享年三十八才。京を脱出して三日後の事であったという。

平治の乱で敗走する義朝一行



『平治物語絵巻』より 右の子供は頼朝

頼朝は義朝の三男だった

父親の義朝は、東国と都をしばしば往復し、その間に儲けた子どもは、長男義平をはじめ

めとして、異母兄弟は十人にのぼる。三番目の頼朝の母親は、熱田神宮大宮司藤原季範の娘の由良御前である。当時の熱田大宮司家は、男子は後白河院の北面武士となるものが多く、女子には後白河院母の待賢門院や姉の統子内親王（上西門院）に仕える女房がいるので、由良御前自身も、上西門院の女房であった可能性が示唆されている。

義朝の正室由良御前は・・・

久安年間の頃に結婚したと推測され、義朝との間に頼朝、希義、坊門姫の三子をもうけた。なお義門も彼女が所生ではないかとの説がある。

頼朝は、久安三年四月八日（1147年5月9日）、尾張国熱田（現在の名古屋市熱田区）に生まれ、正室の長男だった頼朝は、嫡男として育てられたようだ。義朝が保元の乱で勝利を収めたころであるが、頼朝は幼くして宮仕えによって、官職を与えられた。

頼朝は殿上人として・・・

保元三年（1158）、後白河天皇の准母として皇后宮となった統子内親王に仕えて皇后宮権少進、ついで保元四年一月に右近衛将監、二月には統子内親王が院号宣下を受けて女院上西門院となると、頼朝は上西門院藏人に補された。前記したように、母親の縁故に

よるものであった。ただし由良御前は、保元四年三月に亡くなっている。

殿上始が行われた際には徳大寺実定、平清盛といった殿上人が集う中で、頼朝は、坊門信隆、吉田経房らとともに献盃役をつとめている。また、同年六月には二条天皇の藏人に補任された。

兄の朝長は、頼朝より先に任官して従五位下の位階を得ていた（内大臣を務めた公卿、中山忠親の日記、『山槐記』に記されている）が、頼朝の昇進はより早いことから、母親の手柄が群を抜いて高い頼朝が、義朝の後継者として待遇されていたと考えられている。

因みに熱田神宮は、景行天皇四十三年の創建と伝えられ、三種の神器の一つ・草薙神劍を神体とする由緒のある神社である。

坊門姫の母親は由良御前・・・

頼朝の姉か、妹か、論議はされているが、確かな答えはない。坊門姫（久寿元年ハ1154Vまたは久安元年ハ1145V建久元年ハ1190V四月廿日ハ新曆では五月廿五日V）は、『平治物語』で坊門の姫と呼ばれている。本名は不明だが、母は正室の由良御前である。

義朝は平治の乱で討たれ、同母兄弟の頼朝・希義が流罪となつたのち、坊門姫は義朝に仕えた武将、後藤実基に預けられ、都で密かに匿われて育てられたという（『平治物語』）。のちに貴族の一条能保の妻となり、仁安二年（1167）には九条良経室を、安元二年（1176）に嫡男高能を生んだ。この縁戚関係は、東国の主になつた頼朝にとつて重要な都との接点となり、能保は都における鎌倉政権の出先機関として重用された。文治二年（1186）二月、頼朝は坊門姫を後鳥羽天皇の乳母に推挙している。また、頼朝は坊門姫にいくつかの地頭職を与えた。

坊門姫の血筋が四代將軍となる

建久元年、坊門姫は難産で死去、享年四十六（もしくは三十六）だった。頼朝が深く悲しんだこと、また、その追善法要が鎌倉の勝長寿院にて行われたことが『吾妻鏡』に記されている。

坊門姫の死後、その娘が九条良経に嫁いて九条道家と順徳天皇中宮立子を産み、もう一人の娘が西園寺公経に嫁いて西園寺実氏と倫子を産む。坊門姫の孫に当たる九条道家と倫子が結婚



平治の乱で坊門姫を匿う後藤実基。
『前賢故実』より。画：菊池容斎

し、その子供たちが五摂家のうち九条、一条、二条家を興す。また、道家と倫子の間に生まれた子の中に藤原頼経がいる。

頼朝の死後、鎌倉幕府で源氏の將軍が断絶すると、頼朝の姉妹となる坊門姫の血筋であったので、曾孫の藤原頼経が四代將軍に迎えられた。

他にも女子が・・・

江口腹娘、夜叉御前という二人の娘が、義朝の子として『平治物語』の後出本に記されているが、『平治物語』その他には登場しない。夜叉御前は久安六年（1150）生まれ、母は美濃青墓（現・岐阜県大垣市青墓）の長者大炊兼遠の娘延寿だった、という説もある。

△平治の乱に敗れた父が東国にのがれる途中、長田忠致に謀殺され、兄頼朝も平氏に捕らえられたのをなげき、永曆元年2月杭瀬川に身をなげて死んだ。11歳。1150～1160▽

長男の義平、次男・朝長は・・・

義平の母は、相模国三浦郡衣笠城の武将、三浦義明の娘といわれている（ただし、京都郊外、橋本の遊女との説もあり）。久寿二年（1155）、父・義朝が叔父・源義賢（義朝の異母弟、

木曾義仲の父」と対立したとき、義賢の居館であつた武蔵国比企郡の大蔵館を急襲、義賢や義賢の舅・秩父重隆を討ちとつて武名を轟かせた。この戦いは秩父一族内部の家督争いに端を発し、源氏内部の争いが結びついたものであつた。

この大蔵合戦以降、義平は「鎌倉悪源太」と呼ばれるようになったが、この「悪」は善悪の悪ではなく、「強い」「猛々しい」ことを指し、「鎌倉の剛勇な源氏の長男」という意味のようだ。

平治元年（1159）、平治の乱に際して上洛、父に従つて勇戦したが六波羅の戦で敗退し、東国に逃れた。翌年一月、父の死を聞き、上洛して平清盛を討とうとしたが、平氏家人難波経房に捕らえられ、六条河原で斬られた。

相模の武將で波多野莊（現・神奈川県秦野市）を所領とする波多野義通の妹が側室となつて、義朝の次男、朝長が産まれる。相模国松田郷を領して松田冠者と号し、また松田殿とも呼ばれた。父や兄弟とともに平治の乱で平清盛と戦うが敗れ、父や兄弟とともに東国へ落ちる途中、落ち武者狩りに遭つて負傷、傷が悪化して死亡した。

頼朝の異母兄弟の四、五男は・・・

四男の義門は、生没年、母親も、事蹟も不詳、五男、希義は、頼朝の同母弟で、生誕は仁平二年（1152）、兄頼朝が伊豆に配流になった日と同日の永暦元年（1160）三月十一日、土佐国介良莊（現高知県高知市介良）に流罪となり、以降「土佐冠者」と号して、流刑地にて成人した。しかし平家に捕えられ、治承四年（1180）（または寿永元年（1182）とも）に死亡、同母兄である頼朝はその死をいたく悲しんだという。

吉見御所といわれた・・・

六男の範頼は遠江国蒲御厨（現・浜松市）で生まれ育つたので、蒲冠者、蒲殿とも呼ばれる。母親は、遠江国池田宿の遊女といわれている。

公家の藤原範季に養育され、その一字を取つて「範頼」と名乗つたという。官位の高い公家の藤原氏との繋がりには、源頼朝の乳母を務めた比企尼を通してではないか、と推測される。彼女の長女・丹後内侍は宮中で女房を務めており、その後、頼朝の側近・安達



源範頼像（横浜市金沢区太寧寺蔵）

盛長に嫁いた。その娘は範頼の妻となつて、二人の子に恵まれている。

治承・寿永の乱で、範頼は、頼朝の代官として大軍を率い、源義仲と平氏の追討に赴いた。異母弟の源義経と共に、彼らを討ち滅ぼして大任を果たし、その後も源氏一門として、幕府でも重きをなした。

武蔵国横見郡吉見（現・埼玉県比企郡吉見町）のあたりを領して吉見御所と尊称された。常に頼朝に従順、異心なきを誓っていたのであるが、建久四年、頼朝に疑いをもたれた範頼は、伊豆国に流され、修善寺に幽閉されて、誅殺されたともいわれている。修善寺に墓所がある。

常盤御前を母親として・・・

阿野あのぜんじょう全成（ぜんせい、とも）は、源義朝の七男、側室の常盤御前の長男。幼名今若。平治の乱で義朝が敗れた七才の時、母・兄弟と共に吉野山で捕縛され、醍醐寺に入つて出家、成長するに従つて源氏の子らしく勇猛となり、その荒法師ぶりから醍醐の悪禪師とも呼ばれたと伝わる。

治承四年、頼朝の拳兵を聞いたので、これに呼応すべく京都を抜け出して東国に下つた。

この時は頼朝が石橋山合戦に敗れた直後だったため、相模国渋谷荘の佐々木秀義に匿われ、十月一日に下総鷺沼（現在の習志野市）で、相模に向う頼朝の軍勢に合流した。

同年十一月には武蔵国の長尾寺（威光寺）を与えられて住持した。さらに駿河国駿東郡阿野荘（静岡県沼津市西部）を領したので、その地名を苗字として阿野全成と称えた。

北条時政の娘、阿波局を娶り、これが千幡（のちの実朝）の乳母になつたので、頼朝の没後は、千幡の擁立をはかる北条氏と二代將軍頼家との対立に巻き込まれたものと思われる。建仁三年（1203）五月、頼家に対する謀反の疑いによつて常陸国に配流され、翌月下野国で誅殺された。しかも子の頼全も京都で討たれた。墓所は阿野の館跡という大泉寺（沼津市井出）。

八男の義円ぎえん（久寿二年へ1155、治承五年へ1181年）は、幼名を乙若丸。子に愛智義成。園城寺で出家して卿公きょうこう円成となり、後白河天皇皇子、円恵法親王の坊官を務めた。異母兄の頼朝が打倒平家の兵を挙げると、その指揮下に合流し、父の義朝から一字をとつて義円と改名する。治承五年（1181）、叔父源行家が尾張で拳兵すると、頼朝の命により、援軍として参戦、墨俣川河畔で平重衡らの軍と対峙する（墨俣川の戦い）。この時、義円は単騎敵陣に夜襲を仕掛けようと試みるが失敗し、平家の家人・高橋盛綱と交

戦の末に討ち取られた。享年、二十七才。

遺児の義成は愛智荘（現愛知県愛知郡）を領し、愛智氏の祖となった。

九男の義経は伝説的な人・・・

幼名は牛若丸。検非違使・左衛門少尉・伊予守。九郎判官と呼ばれる。

幼少時は鞍馬寺に預けられるが、のちに抜けだして奥州の藤原秀衡の庇護を受けた。

治承四年（1180）、兄源頼朝の挙兵を知ると秀衡の制止を振り切って参陣した。そ

の後、頼朝の代官として出陣し、木曾義仲討伐の宇治川の戦い、平家討伐の一ノ谷の戦い・

屋島の戦いに勝利した。さらに壇ノ浦の戦いでついに平家を滅ぼした。

しかし、鎌倉凱旋を許されず、京に戻った義経は、打倒頼朝の挙兵を試みた。しかし兵が集まらず都落ちして、逃避行の末に藤原秀衡を頼って奥州へ赴く。秀衡が亡くなるとその子藤原泰衡が頼朝の要求に屈し、泰衡の手勢に攻撃された義経は自害した。

武士の台頭と平氏の政権

十世紀になって地方の政治が乱れ、各地で成長した豪族や荘官は、他の豪族や受領から自らを守るために武装し、互いに争って勢力を拡大した。農民から武士が発生し、家子と呼ばれる一族や、郎等といわれた従者を従え、武士団を結成した。

特に武蔵の国では良馬を産したので、武士の成長は目覚ましかった。十一世紀になると、地方に下って土着した貴族たちを棟梁とする大武士団が結成された。こうして有力な桓武平氏と清和源氏とが生まれたのである。

十一世紀後半のことになる。東北地方で起った前九年の役（1051～62）、後三年の役（1083～87）を鎮圧した源氏の棟梁、源義家は、東国の武士の信望を高めて勢力を伸ばした。

身辺を守るために・・・

十一世紀の終わり、ときの白河天皇は、摂関家を抑えて親政を行ったのち、位を譲って



上皇となつてからも政治から離れなかつた。上皇の御所を院といつていたので、この政治は院政と呼ばれる。上皇は源氏と平氏の武士団に身辺の警護に当たらせた。

院政のもとで成長した武士は、東国で源氏が、また西国では平氏が勢いを得て、上皇と天皇との政治の実権争いが起こると、源氏と平氏はその争いに動員されて戦つた。保元の乱である。

保元の乱は・・・

保元元年（1156）、摂関家の内紛と、皇位継承問題が結び付いて起つた戦乱である。藤原忠通（兄）と頼長（弟）との勢力争いは、鳥羽法皇の死後、天皇方の藤原忠通は後白河天皇に与し、一方、頼長は崇徳上皇方と結んで争つた。どちらも源氏・平氏の武士を集め、京都市内で戦つたのである。

後白河天皇方の平清盛と源義朝らの夜討ちによつて、崇徳上皇方は敗北したが、このとき源為義、義朝父子は、両陣営に分かれて争つたので、敗者となつた父、為義は、義朝の元に出頭する。

父の助命を訴えたが、義朝の願いは却下され、義朝の手によつて処刑された。『保元物語』には、父や幼い弟達を斬ることになる悲劇が詳しく描かれていて涙をそそる。義朝の弟の源為朝は伊豆大島へ流罪となり、崇徳上皇は讃岐に配流となつた。また藤原頼長は、流れ矢の傷がもとで死去し、平清盛の叔父に当る平忠正は捕らわれて斬罪となつた。

平清盛と源義朝の進出

夜襲によつて勝利を収めた天皇方の武士たちは、その実力を示し、朝廷から恩賞が与えられた。ところが、保元の乱から三年後の平治元年（1159）の十二月、戦乱が勃発した。保元の乱から三年後のことである。天皇親政となつたが、その下で権勢を誇つた藤原通憲（法名は信西）は、後白河天皇が皇位を二条天皇に譲ると、藤原信頼と対立する。一方、戦功の薄い平清盛の方が高い恩賞を受けたため、義朝の不満が増大して、信頼らの反信西派と義朝が結びついた。

平治の乱が起る

平清盛が熊野詣で京を留守している間に、藤原信頼と源義朝を中心として起こされたクーデターが端緒となつた。

信頼と義朝は、後白河上皇と二条天皇を幽閉し、信西邸を襲撃する。しかし、急ぎ帰洛した清盛は、二条天皇を清盛の六波羅邸に移し、信頼・義朝追討の宣旨を受けた。追い込まれた義朝は軍勢を率いて六波羅に攻め込み、源義平（悪源太）ら東国武士が勇戦するが、激しい合戦の末、数に勝る平家方が勝利した。

この戦いで平清盛は、参議正三位に列せられた。また一族も多くの恩賞を受け、ここに平氏政権の基礎が築かれたのである。

落ち武者たちは・・・

一方、逃れた藤原信頼は、義朝とともに東国へ落ちようとするが、義朝から拒絶された。仁和寺にいた後白河院にすぎり、助命を嘆願したが、朝廷は信頼を謀反の張本人として許さず、公卿でありながら六条河原で斬首された。享年二十七才。

義朝は逃亡先の尾張で討ち取られたが、義朝の嫡子、源頼朝は助命され、流罪となつて伊豆に流され、

二十年後の決起・旗揚げまで流人生活を送った。また、常磐御前とまひらみ所生の今若（阿野全成）・乙若（義円）・牛若（源義経）の幼い三兄弟も助命されている。



『平治物語絵巻』三条殿焼討（ボストン美術館所蔵）

『吾妻鏡』には・・・

『吾妻鏡』を読む

『吾妻鏡』または『東鑑』（あずまかがみ、あづまかがみ）は、鎌倉幕府の初代将軍・源頼朝から第六代将軍・宗尊親王までの将軍記という構成で、治承四年（1180）から文永三年（1266）までの事績を編年体で記した書で、成立時期は鎌倉時代末期の1300年頃、編纂者は幕府中枢の複数の者と見られている。全52巻（ただし第45巻欠）。編纂当時の権力者であった北条得宗家の側からの記述であることと、編纂当時に残る記録、伝承などからの編纂であるが、鎌倉時代の基本史料となっている。

下は、周防国（山口県）の守護大名、大内氏に仕えた戦国武将、右田弘詮が書き写した『吾妻鏡』の写本、吉川資料館（山口県岩国市）所蔵で、重要文化財。



『吾妻鏡』吉川本
右田弘詮の序文

大倉御所への引越し・・・

治承四年十二月小十二日庚寅。天晴風靜。亥尅。前武衛「將軍」新造御亭有御移徙之儀。爲景義奉行。去十月有事始。令營作于大倉郷也。時尅。自上總權介廣常之宅。入御新亭。御水干。御騎馬〔石禾栗毛〕和田小太郎義盛候最前。加々美次郎長清候御駕左方。毛呂冠者季光在同右。北條殿。同四郎主〔義時〕。足利冠者義兼。山名冠者義範。千葉介常胤。同太郎胤正。同六郎大夫胤頼。藤九郎盛長。土肥次郎實平。岡崎四郎義實。工藤庄司景光。宇佐美三郎助茂。土屋三郎宗遠。佐々木太郎定綱。同三郎盛綱以下供奉。畠山次郎重忠候最末。入御于

〔読み下し〕治承四年（1180）十二月小十二日庚寅。天晴れ風靜か。亥尅。前武衛將軍、新造の御亭に御移徙の儀あり。景義奉行を爲す。去る十月事始あり。大倉郷于營作令む也。時尅。上總權介廣常之宅自り新亭に入御す。御水干、御騎馬〔石禾栗毛〕。和田小太郎義盛最前に候ひ、加々美次郎長清御駕左方に候。毛呂冠者季光同じく右に在り。北條殿、同じき四郎主、足利冠者義兼、山名冠者義範、千葉介常胤、同じき太郎胤正、同じき六郎胤頼、藤九郎盛長、土肥次郎實平、岡崎四郎義實、工藤庄司景光、宇佐美三郎助茂、土屋三郎宗遠、佐々木太郎定綱、同じき三郎盛綱以下供奉す。畠山次郎重忠最末に候。寢殿于入御之後、御共の輩は侍所〔十八ヶ間〕に參じ、二行に對座す。義盛其の中央

寢殿之後。御共輩參侍所。(十八ヶ間。)二行對座。義盛候其中央。着致云々。凡出仕之者三百十一人云々。又御家人等同構宿館。自爾以降。東國皆見其有道。推而爲鎌倉主。所素邊鄙。而海人野叟之外。卜居之類少之。正當于此時間。閭巷直路。村里授号。加之家屋並葺。門扉輒軒云々。今日。園城寺爲平家焼失。金堂以下堂舎塔廟。并大小乘經卷。顯密聖教。大畧以化灰燼云々。

に候ひ着到すと云々。凡そ出仕之者三百十一人と云々。又、御家人等同じく宿館を構へる。尔し自り以降、東國皆其の有道を見、推し而鎌倉の主と爲す。所は素より邊鄙にして、海人野叟之外、卜居之類之少なく、正に此時于當るの間、閭巷路を直し、村里に号を授け、加之、家屋葺を並べ、門扉軒を輒むと云々。

今日、園城寺平家の爲焼失す。金堂以下堂舎、塔廟並びに大小乗の經卷、顯密の聖教、大畧以て灰燼に化すと云々。

〔要約〕 治承四年(1180)十二月十二日、天は晴れ、風靜かな午後十時頃、將軍頼朝が建てた新しい屋敷に引越す儀式が行なわれた。大庭平太景義が奉行となり、去る十月に事始めがあつて、大倉郷に建設していたもので、上総權介廣常の屋敷から、水干(簡素な装束)の着衣で、石和栗毛の騎馬に乗つて新御殿に入られた。

和田太郎義盛が先頭に、加々美次郎長清は將軍の馬の左側に従い、毛呂冠者季光が同様に右に在り、北條四郎時政、同四郎義時、足利冠者義兼、山名冠者義範、千葉介常胤、同太郎胤正、同六郎胤頼、藤九郎盛長、土肥次郎實平、岡崎四郎義實、工藤庄司景光、宇佐美三郎助茂、土屋三郎宗遠、佐々木太郎定綱、同三郎盛綱等がお供として続く。畠山次郎重忠は最後に従い、寢殿に入られた後、お供の人達は侍所「十八間」で、二列に向かい合つて座つた。和田太郎義盛は中央に座り、着致状を記した。出仕した者は凡そ三百十一人だつた。

又、御家人達も同様に宿や館を構え、これから後は、関東の武士達は頼朝の力を理解して、一致して鎌倉の主人と認めました。鎌倉は、元々辺鄙な所で、漁師と百姓以外は住む人が少なかつたのだが、街中の道が整備されて、郊外の村や里にも名前が付けられたので、家屋が屋根を並べるようになった。

今日、園城寺が平家の為に焼かれた。金堂や建物・堂塔も大乘・小乗のお経も密教の道具類も、殆んど灰になつてしまつた。

文治五年十二月大九日甲午。此間。被建御厩。〔十五箇間。〕奥州駒中被撰上馬三十疋。始被立置之。景時可爲別當之由奉之云々。今日永福寺事始也。於奥州。令覽泰衡管領之精舎。被企當寺花構之懇府。且有數万之怨靈。且爲救三有之苦果也。抑彼梵閣等。並宇之中。有二階大堂。〔号大長壽院。〕專依被摸之。別号二階堂歟。梢雲挿天之極碧落。起從中丹之謝。揚金荆玉之飭紺殿。剩加後素之圖。謂其濫觴。非無由緒云々。

〔要約〕 文治五年(二〇九)十二月九日甲午。この間、厩〔十五間〕を建てられました。奥州平泉から連れてきた馬のうちでも、上等の馬三十頭を選ばれて、初めて奥州馬専用の厩を

〔読み下し〕文治五年(二〇九)十二月大九日甲午。此間。被建御厩〔十五箇間〕を建被る。奥州の駒の中、上馬三十疋を撰被、始めて之を立置被る。景時別當を爲す可し之由、之を奉ると云々。今日永福寺事始也。奥州に於て、泰衡管領之精舎を覽令め、當寺花構之懇府を企て被る。且は數万之怨靈を宥め、且は三有之苦果を救はん爲也。抑、彼之梵閣等宇を並ぶる之中に二階大堂有り〔大長壽院と号す〕専ら之を摸被るに依て別して二階堂と号する歟。梢雲挿天之碧落を極め、中丹之謝從り起り。掲金荆玉之紺殿を飭り、剩へ後素之圖を加う。其の濫觴の謂れ、由緒無きに非と云々。

建てられたのです。梶原平三景時が担当して指揮することになりました。

今日が、永福寺の建立を決めた日になります。奥州平泉で、泰衡が管理している寺院をご覧になって、この寺の建立を思い立ったのです。一つは、今までの戦いで亡くなった数方の怨霊をなだめ、又、欲有・色有・無色有の三界に惑う苦惱を救うための供養なのです。実は平泉の寺院群の中に、二階建ての大きなお堂〔大長寿院と云う〕があり、これを模したので、二階堂と云うことになったのでしょうか。屋根の梢が雲まで届くほど遙かに聳えている大きな建物で、心底から感謝の念を起こすでしょう。金銀宝石で飾り立て、その上、絵面を書き加えるのです。ことの起こりは、こういう訳なのです。

建久二年二月小十五日甲午。風烈。鶴岳若宮臨時祭。流鏑馬已下如例。今日被始行經供養。(法華三部)導師安樂房重慶。(當宮供僧一和尚)御布施導師裏物二。安房判官代取之。請僧口別帖絹二疋云々。及晩幕下歴覽大倉山邊給。爲建立精舎。得其靈地給之故也。是去々年征奥州給之時。合戦無為之後。鎌倉中可草創伽藍之由。有御立願。而彼年暮訖。去年奥州騒動。國土飢饉并御上洛等計會。依之無營作。於今者郡國悉靜謐。民庶皆豊稔之間。漸有其沙汰。善信。行政。俊兼等可奉行之云々。

(読み下し)建久二年(1191)二月小十五日甲午。風烈し。つるがわかみや、流鏑馬已下例の如し。今日、經供養鶴岳若宮の臨時祭。流鏑馬已下例の如し。今日、經供養(法華三部)を始行被る。導師は安樂房重慶(當宮供僧の一の和尚)。御布施は導師に裏物二。安房判官代之を取る。請僧は口別に帖絹二疋と云々。晩に及び幕下大倉山邊を歴覽し給ふ。精舎建立の爲、其の靈地を得給はんが之故也。是、去々年奥州を征し給ふ之時、合戦無為之後は、鎌倉中に伽藍を草創可し之由、御立願有り。而るに彼の年は暮訖。去年奥州騒動し、國土飢饉并びに御上洛等計會す。これに依て營作無し。今に於て者郡、國悉く靜謐す。民庶皆豊稔之間、漸く其の沙汰有り。善信、行政、俊兼等之を奉行可しと云々。

〔要約〕建久二年(1191)二月十五日は風が強、鶴岡八幡宮の臨時のお祭りだった。流鏑馬などの奉納は何時もの通りで、今日は(涅槃会か)はお経を上げる日なので、法華經三部の読経が始まった。指導僧は安樂坊重慶(当八幡宮の一番上の和尚さん)で、お布施は風呂敷包み二つ、安房判官代が手渡した。お供の坊さん達には、一人あて帖絹二匹(四反)。夜になって、將軍は大倉山の辺りを見て歩かれた。新しいお寺を建てるために、靈驗新たな場所を見付けるためとのこと。

一昨年奥州を征服したとき、戦いが終わったら、鎌倉にお寺を創建しようと願をかけたからだが、一昨年はあつという間に過ぎ去ってしまった、そして去年は、奥州で騒動が勃発(大河次郎兼任の乱か)し、飢饉で農作物が不足し、また上洛されたり、建設の閑が無かったのです。今ようやく国も静かに落ち着き、豊年で人々の余裕が出来たので、やつとこれを実行することを決められ、三善善信、藤原行政、筑後權守俊兼が担当することになったのです。

建久二年三月小四日壬子。陰。南風烈。丑剋小町大路邊失火。江間殿。相摸守。村上判官代。比企右衛門尉。同藤内。佐々木三郎。昌寛法橋。新田四郎。工藤小次郎。佐貫四郎已下人屋敷十字焼亡。餘炎如飛而移于鶴岡馬場本之塔婆。此間幕府同災。則亦若宮神殿廻廊經所等悉以化灰燼。供僧宿房等少々同不遁此災云々。凡邦房之言如指掌歟。寅剋。入御藤九郎盛長甘繩宅。依炎上事也。

〔読み下し〕建久二年(二〇二)三月小四日壬子。陰。南風烈なんふうはげし。丑剋うしをく、小町大路邊から失火しつかす。江間殿えまどの、相摸守さがつし、村上判官代むらかみはんくわんだい、比企右衛門尉ひきうゑもんじろう、同じく藤内とうない、佐々木三郎ささきのみさぶらう、昌寛法橋しょうかんほつきょう、仁田四郎にたんのしろう、工藤小次郎くどうのこじろう、佐貫四郎已下さぐわいのしろういの人屋敷十字焼亡つるがおかのぼほもこのす。餘炎飛ぶが如くしすまほて、鶴岡馬場本之塔婆つるがのまばらに移る。此の間このま、幕府同じく災わざす。則ち亦すなはち、若宮神殿わがみやしんでん廻廊經所等かいろうきよじょうら悉く以て灰燼はいじんと化かす。供僧の宿坊等少々くせうのしゆくぼうら同どうじく此の災このわざを遁れのがれずずと云々。凡そ邦房之言ばんぼうのげん、掌てを指さすが如ごとき歟か。寅剋えんをく、藤九郎盛長の甘繩宅あまたわたくしに入御にまじす。炎上えんじやうの事ことに依よつて也な。

〔要約〕 語建久二年(1191)三月四日は曇り。南風が激しい日で、日付が変わって直ぐ、午前二時頃、小町大路の辺りから出火した。江間北条義時殿、大内相模守惟義、八田右衛門尉知家、比企藤内朝宗、佐々木三郎盛綱、一品房昌寛法橋、新田四郎忠常、工藤小次郎行光、佐貫四郎廣綱の家を始め、民家数十軒が焼失した。しかも火の粉が飛んで、鶴岡八幡宮の流鏑馬馬場の塔に燃え移り、この火事で幕府にも引火、若宮寝殿、回廊などに燃え移り、すべて灰燼に帰してしまった。八幡宮の坊さん達の宿坊の一部も、同様にこの延焼を逃れられなかった。昨晚の広田次郎邦房の言葉の云う通りでした。午前四時頃、將軍は火事から逃れるため、藤九郎盛長の甘繩の家へ入られた。

建久三年正月大廿一日甲午。渡御于新造御堂地。犯土之間。運土石疋夫等之中。有左眼盲之男。幕下覽恠之。彼者自何國誰人進哉之由被尋仰。仍景時雖相尋之不分明。被召寄御前。佐貫四郎大夫伺御目。面縛之處。懷中帶一尺餘打刀。殆如寒氷。又覽其首。以魚鱗而覆眼上。弥知食有害心者之由。被推問之。名謁申言。上総五郎兵衛尉也。爲奉度幕下。數日經廻鎌倉中云々。即下賜于義盛。可被召尋同意輩之旨。被仰含之云々。

〔読み下し〕建久三年(1192)正月大廿一日甲午。新造の御堂の地于渡御す。犯土之間。土石を運ぶ疋夫等の中に、左眼盲の男有り。幕下覽て之を恠しみ。彼の者は何國自りの誰人が進ぜる哉之由尋ね仰せ被る。仍て景時之を相尋ねると雖も不分明。御前に召し寄せ被る。佐貫四郎大夫御目を伺い、面縛する之處、懷中に一尺餘の打刀を帶る。殆んど寒氷の如し。又、其の首を覽るに、魚鱗を以て眼の上を覆ふ。弥よ害心有る者之由と知ろし食し、之を推問被る。名謁り申して言はく。上総五郎兵衛尉也。幕下を度り奉らん爲。數日鎌倉中を經廻ると云々。即ち義盛于下し賜はる。同意の輩を召し尋ね被る可し之旨。之を仰せ含め被ると云々。

〔要約〕建久三年(1192)正月二十一日甲午。將軍は、新築予定のお堂の土地へ行かれた。犯土(つち、ぼんど)のときは、土木工事などを慎むべきであるとされているが、土砂を運ぶ人夫の中に、左目が見えない男がいた。頼朝はこれを見て怪しく思い、一体あの者は何処の国から来た何と言う御家人の提供なのか、と質問されました。そこで梶原景時が調べたが、誰だか分からなかった。そこで御前に呼びつけ、佐貫四郎大夫は頼朝の目の合図で、縛り上げてしまいましたが、懷の中に一尺(30cm)余りの刀を隠していた。実に冷や汗ものでした。又、その目を見ると魚の鱗で眼球を覆い、目の不自由な振りをしていた。いよいよもつて怪しい奴だと知つたので、尋問したところ、名を名乗るのには、上総五郎兵衛尉といい、頼朝を暗殺しようと、數日鎌倉中をうろついていたという。直ぐ侍所の和田義盛に渡し、仲間の名前を尋問するようにと、言いつけられた。

二階堂の前の池に石を立てる・・・

建久三年九月大十一日庚辰。静玄立堂前池石。將軍家昨日御逗留行政宅。爲覽此事也。汀野埋石。金沼汀野筋鵜會石嶋等石。悉以今日立終之。至沼石并形石等者一丈許也。以静玄訓。畠山次郎重忠一人捧持之。渡行池中心立置之。觀者莫不感其力云々。

〔読み下し〕建久三年(1192)九月大十一日庚辰。静玄堂前の池の石を立つ。將軍家昨日自り行政の宅に御逗留。此の事を覽ん爲也。汀野の埋石、金沼汀野筋、鵜會石嶋等の石、悉く以て今日之を立て終る。沼石並びに形石等に至て者一丈許り也。静玄の訓へを以て、畠山次郎重忠一人之を捧げ持ち、池の中心に渡り行き之を立て置く。觀者其の力を感不は莫しと云々。

〔要約〕建久三年(1192)九月十一日庚辰。京都からから呼ばれた庭師の静玄が、二階堂の前の池に石を立てる。將軍は、この作業を見るため、昨日から主計允藤原行政の屋敷にお泊りになった。汀に埋め並べる石、金沼の汀をたどるように並んだ筋石、鵜が留まっているような島形の石など、全て今日中に立て終えた。沼石や形石に至っては、一丈(3m)ほどもあった。静玄の指図通りに、畠山次郎重忠が一人で抱え持つて、池の真ん中まで運び、これを立てて置いたので、見ている人達で、その力持ちに感心しない人はありません。

永福寺ついに完成する

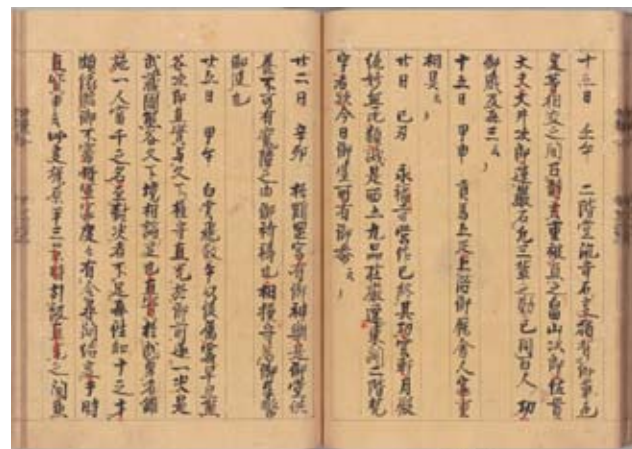
建久三年十一月小廿日己丑。永福寺營作已終其功。雲軒月殿。絶妙無比類。誠是西土九品莊嚴。遷東關二階梵宇者歟。今日御臺所有御參云々。

〔読み下し〕建久三年(1192)十一月小廿日己丑。永福寺の營作已に其の功を終る。雲軒月殿。絶妙無比類。誠に是、西土九品の莊嚴。東關二階の梵宇に遷す者歟。今日、御臺所、御參有りと云々。

〔要約〕建久三年(1192)十一月二十日己丑。永福寺の工事が終わりました。雲に届くような軒も、月の様に輝く建物の素晴らしさは比べる物がありません。西国浄土の阿弥陀の九品の莊嚴さが、まさにこの、関東の地に立つ、二階建てに移つて来たようです。今日、御台所政子様も見物に来られました。



吾妻鏡（北条本）卷十四
北条氏が所蔵していた写本とされ、江戸城内の紅葉山
文庫に収蔵され、現在は国立公文書館蔵で重要文化財



吾妻鏡（北条本）卷十二
建久三年(1192)十一月廿日 永福寺ついに完成

新疆ウイグル自治区は、中華人民共和国の西端にある。民族自治区として、伝統的な古い暮し振りがいまま残され、ツーリストにとって魅力に溢れた地域である。

西域紀行 その三

深瀬克

1. 砂漠の洪水

タクラマカン砂漠に「大洪水」が起きるなんて、夢想だにしたことが無かった。降水量が極端に少ないのに、何と年に数回「大洪水」が起きるのは事実のよ

天山山脈は保水力が無い

うだ。タクラマカン砂漠には雨が降らないが、天山山脈には雨も雪も降る。天山山脈は「はげ山」で樹木がほとんど無い。このため降った雨は岩山の表面を滑り落ち、しみ込むこと無しに一気に麓に流れ下ってくる。そしてその洪水はタクラマカン砂漠に向かって押し寄せるのだ。その流れをせき止めるように自動車道路が建設されてい

る。このため、洪水で道路が流されることが無いように、数百メートル毎に道路の下を横切る水路を作っている。この水路に向かって洪水を誘導するために扇形の土手をつくっている（下の写真参照）のだが、これを車窓から見た時、何のために作ったのか、理解できなかった。大自然は、表面的な論理や常識をはるかに超えたものであった。（写真の奥には天山山脈が横たわっているのだが、残念ながら砂塵に霞んで見ることが出来ない。）

2. ハミ瓜は何処に

ハミ瓜の美味しさについては、ガイドブックなどにしばしば書かれているので、今回の旅行中に是非食べたいと思っていた。クチャヤに着いて瓜を見つけ「ハミ瓜」かと尋ねると「クチャヤ」とのこと。カシユガルで尋ねると「カシユガル瓜」とのこと。すなわち、各地で栽培されてい



糖度の高い「クチャヤ瓜」



街道沿いの「瓜売り」

る瓜は、それぞれの土地の瓜であり、ハミ瓜はハミ（哈密）地方でとれる瓜のことだった。結局、ハミには行かなかったためハミ瓜は食べなかったが、行く先々で瓜を食べた。さすが乾燥地でとれた瓜は糖度が高く、色鮮やかで香りもあり、どれも美味であった。

3. トルファンの干しぶどう

クチャヤのバザールで干しぶどうを買おうとすると、現地ガイドが『干しぶどうが一番美味しいのはトルファンだよ』と言う。トルファンは「火州」とも呼ばれる乾燥した大盆地で、夏の最高気温は46℃、冬の最低気温はマイナス28℃にもなると言う。標高は海拔マイナス150mもあるそうで、死海のほとりのマイナス412mには及ばないが、地球の「えくぼ」といった所だ。

ここの干しぶどう作りは天日干しはせず、日干し煉瓦で造った風通しの良い倉庫の中で乾燥させている。これにより手間は掛かるが美味しい干しぶどうができるのだと言う。黒



干しぶどうは日干し煉瓦で造った倉庫の中で乾燥



洪水を誘導する扇形の土手

い干しぶどうはコッテリとした甘さがあつて子どもたちに喜ばれ、薄緑色の干しぶどうは「緑の寶石」と呼ばれているそうで、適度な酸っぱさもあり大人にお勧めとの説明があつた。試食してみると黒い方は今まで食べた干しぶどうで一番と感じるほど甘くまろやかであり、緑の寶石は王様が好んで食べたと言われるだけあつて上品な甘酸っぱさがありウイスキーと相性が良さそうに感じたので、両方買い求めた。

4. 不思議発見！

カシユガルの雑貨屋の店先で、現地ガイドが『これは何でしょう？』と写真のものを見せた。われわれは「パイプ」とか「キセル」とか勝手なことを言ったが全部ハズレ。これは乳児にオシメをする代わりに、右側のものは男の子のオチンチンに当て、左側は女の子用に使い、股に挟んで揺りかごに結わえ付け、揺りかごの下にお碗を置いて出てきたオシッコを受けるのだそうだ。写真ではお碗が見えないが、赤ちゃんが揺りかごに結わえ付けられているのが分る。これは「オムツかぶれ」にもなりにくそうな優れ物だ。こう言う「不思議発見」があるので、旅行はやめられない！

(2012.9.8 ～ 16)



これを付けて揺りかごに寝る赤ちゃん



「これ何？」

「市民フォーラム」は・・・

地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によつて市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」は市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL090 (3048) 5502

編集部 原宛にどうぞ

本紙「市民プレス」は年四回(一、四、七、十月、各五日)発行